

鎌倉国宝館開館 90 周年記念シンポジウム 「鎌倉国宝館 90 年の歩みとその未来」

平成 30 年 11 月 23 日（金・祝）

鎌倉商工会議所 地下ホール

【講演】

- ・ 木下直之氏（東京大学教授・静岡県立美術館館長）
「鎌倉国宝館の未来—鶴岡八幡宮境内にあることの意義について」
- ・ 富岡幸一郎氏（鎌倉同人会理事長・鎌倉文学館館長・関東学院大学教授）
「鎌倉国宝館黎明期を支えた鎌倉同人会」
- ・ 吉田茂穂氏（鶴岡八幡宮宮司）
「鶴岡八幡宮と鎌倉国宝館」

※肩書は当時のもの

木下直之氏 講演「鎌倉国宝館の未来—鶴岡八幡宮境内にあることの意義について」

みなさんこんにちは、木下です。トップバッターということで、まずはこの展覧会を通して鎌倉国宝館のことをお話していきたいと思っております。演題は「鎌倉国宝館の未来—鶴岡八幡宮境内にあることの意義について」としました。先ほど鈴木館長からもご紹介がありましたけれど、展覧会は 12 月 2 日まで開催されています。皆さん、もうご覧になっていますか。サブタイトルが「戦時下の博物館と守り抜かれた名宝」というもので、戦時下の博物館に着目した非常にユニークな展覧会です。戦争中に博物館は何をやっていたのかを考える上でも大変意義のある試みです。この展覧会を拝見した私には 3 つ感想があります。それを最初にお話しします。



木下直之氏

戦時下で博物館がどのような活動を展開するのか。博物館とは、その時々ので社会の要請に応じて活動を展開するわけですが、戦争が激しくなれば館を閉じざるをえない博物館が多かったと思います。ところが驚いたことに、鎌倉国宝館の閉館期間はわずかに昭和 20 年 8 月 22 日から 10 月 20 日まで、ということは 8 月 15 日の終戦の日も開いていたのですね。8 月 21 日まで開けており、再開が 10 月 21 日だという文書が展示されておりました。本当に驚きました。

例えば上野の東京国立博物館、当時は東京帝室博物館と呼ばれていました。これもだいぶ前に閉めて（昭和 20 年 3 月）、コレクションを疎開させます。もちろん東京は鎌倉と違って激しい空襲を受けたからですが、再開（昭和 21 年 3 月）までにはかなり長い時間を要しました。鎌倉国宝館は戦時下でも活動を続けていた、というのがまず重要なことであると指摘しておきます。

もう 1 つ驚いたのは、これは戦後の文部省による調査に答えた文書ですが、昭和 19 年の開館日数が 362 日とあるのです。1 年 365 日のうち、たった 3 日しか閉めていない。逆にいつ閉めたのだろう、お盆の頃でしょうか、今からでは考えられないほど活発に活動していたのだと思います。昭和 19 年度の入館者数はおよそ 11

万人でした。今が5万人弱、と聞いておりますので、2倍以上の人が入っていて、本当に戦時下で活発な活動を展開していたことがわかります。

2つ目の感想は、展示されている資料を見ていきますと、創設時の鎌倉国宝館には「宝物館」という名前の選択肢があった。それから現在の場所ではなくて、2年前まで近代美術館が建っていた平家池の辺りに建設の候補地があった、これにも驚きました。

3つ目の感想として、京都、奈良の国立の大きな博物館に対して鎌倉国宝館というのが、奈良・京都が古代の日本を示そうとしたのに対して、中世の日本、中世の鎌倉を示す、という大きな目標を持った博物館としてスタートしたのではないかと、そんなことを思いました。それが展覧会を拝見した感想なのですが、これからそれらをシャッフルしてお話したいと思います。

まずは鎌倉国宝館の90年という長い歴史ですね。私もこれまでに結構足を運んできた方なのですが、開館からもう90年が経っていることには迂闊にも気がつきませんでした。あと10年で100年の歴史を持つという本当に古い博物館です。鶴岡八幡宮の境内にあって仏教文化に触れるというのはどういう意味か、ということもまずお話ししたい。

昭和3年の開館です。岡田信一郎という建築家の設計で、ご覧のような建物（写真1）が建てられました。この景観はほとんど変わっていないですね。樹木が今はもっと茂っているので、建物の全体は見えにくくなっております。中に入りますと銅板が掲げられておりまして、なぜこの建物を建てたのかという趣旨が示されております。志の高い宣言であると前から思っていて、必ずこれに目を止めます。特に傍線をつけたところです（写真2）。ここには「寶物の修理を完了し其の保存の方を定め、且其の散逸を防ぐと同時に、鎌倉時代の文化藝術を鑑賞し又之を討究せんと欲する」とあります。鎌倉町の町長、それから同人会の理事長、この2人

昭和3年(1928)開館
設計 岡田信一郎



写真1

の連名でなぜ国宝館を建設したのかが宣言されています。傍線を引いた所はとりわけ重要だと思ったのですが、とにかく鎌倉時代の文化を後世に伝えたいという趣旨が明確に宣言されている。これも展覧会と合わせてぜひご覧になってください。

ではなぜ昭和3年にこの博物館が誕生したのか。その前提として、大正12年9月1日に関東地方を襲った大震災があり、鎌倉も大きな被害を受けます。八幡宮の多くの建物も倒壊しました。そこで、もっと安全に、鎌倉の社寺の宝物を、今でいう文化財の一元的な管理をしようという発想で国宝館がつくられたわけです。

建設の趣旨

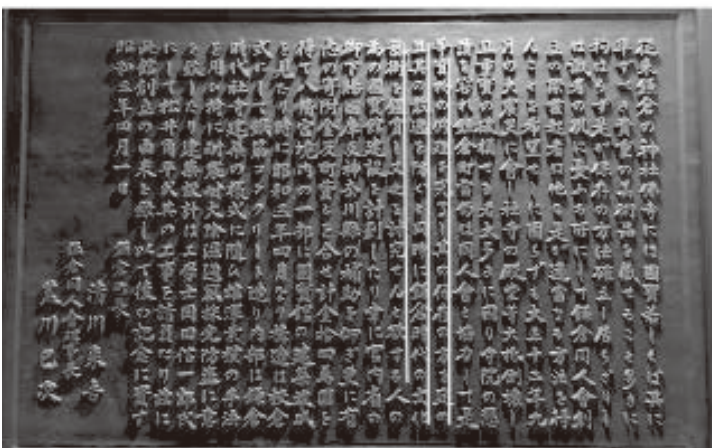


写真2

私は今「文化財」と言いましたけれども、これは戦後の文化財保護法に則った表現で、当時の言い方で言えば「宝物」が一番妥当だと思います。ところが、宝物館ではなくて国宝館にしたことがこの時代をよく表しています。国宝館開館の翌昭和4年に法律が改正され、それまでの「古社寺保存法」が「国宝保存法」に変わるので。これが戦後の文化財保護法につながってくるわけですが、長く日本人は「宝物」という言葉で呼んでいたものを、少しずつ「国宝」に呼び変えてきた歴史があります。「古社寺保存法」は文字通り古い社寺の宝物を保存する、その中の宝物の特に優れたものを「国宝」と呼んできたのですが、その場合でも建造物は国宝ではなかったのです。それは「特別保護建造物」と呼ばれ、国宝とは違うカテゴリーでした。ところが昭和4年以降は建物も国宝となります。言い換えると、国宝という概念が広がってきたということですね。今私たちはもう当たり前で国宝という言葉を使っていますから、例えば姫路城が国宝だと聞いても何も不思議ではないと思うのですが、国宝という言葉が広がったのは、昭和に法制化されたからで、それに先んじた形で、鎌倉国宝館は宝物館ではなく国宝館という名前を選んだのだらうと思います。

今回展示されている中で私にとって一番興味深かったのは、「宝物館」という名前でまず検討されていたということ、これが現在展示されている資料で(写真3)、建設の候補地として池のほとりに宝物館と示されています。

宝物館位置図

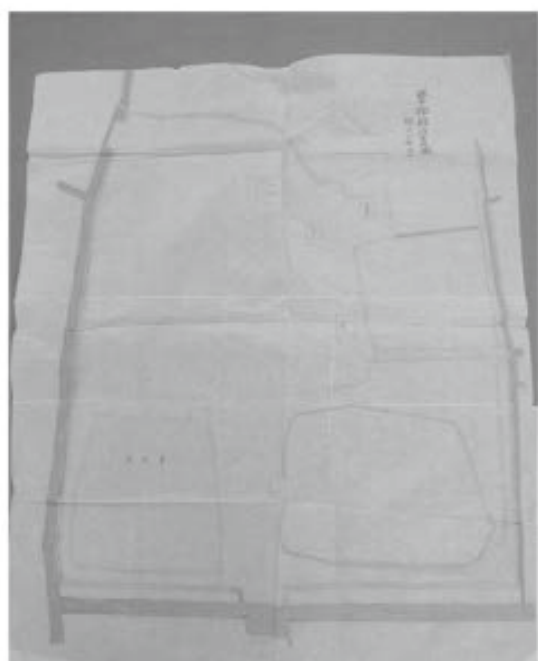


写真3

宝物館から国宝館へ

奈良京都に対する鎌倉の文化を見せる
(古代に対する中世の日本文化)

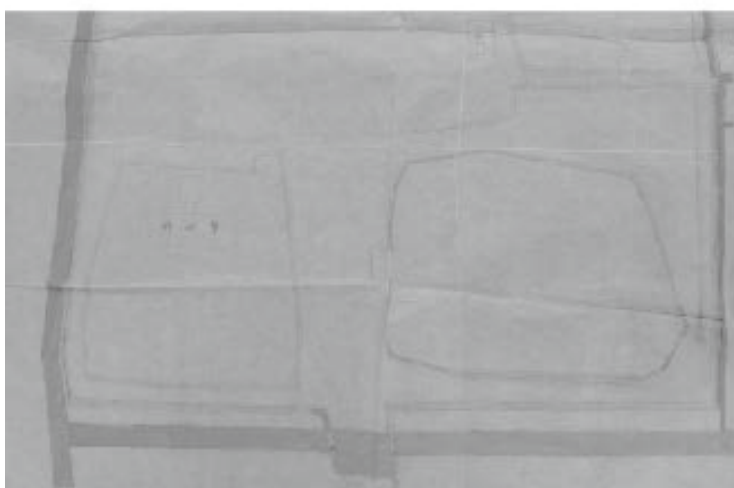


写真3(拡大)

昭和17年といえばだんだんと戦争が激しくなっていく頃ですね。日本の主だった博物館が国宝を扱う時にどのようなことに気をつけるべきか、と文部省が呼びかけて、国宝関係博物館事務協議会が開かれました。

昭和17年2月26日に開かれた会議に関する文書によれば(写真4)、6つの博物館が東京に呼び出されました。歴史の古い順に、東京帝室博物館、靖国神社遊就館、奈良帝室博物館、恩賜京都博物館、鎌倉国宝館、大阪市立美術館の6館です。戦時下で国宝を扱う注意事項を確認した。その次に協議事項が3つありまして、国宝の命令出陳、国宝等の防護対策、そしてその他が協議されました。

国宝の命令出陳とはすごい言葉だなと思いますが、当時の国宝保存法は今の文化財保護法よりももっと厳しく、国宝の展示義務を課していました。今は緩和されております。2番目の協議事項が防護対策で、これから

戦争に向かってどういう対策をとればよいのかを協議したのです。

重要なのは、鎌倉国宝館よりも上に記された4館ですね。というのは、この時点で京都国立博物館、この時点では帝室であって国立ではないのですが、基本的には4館は国が設置したものです。当時は靖国神社付属の戦争博物館であった遊就館も明治の早い時期に生まれた博物館です。その中であって鎌倉国宝館はひとり異質です。先ほどの鈴木館長のご挨拶にもありました通り、その建設を町民が言い出した、完全なボトムアップの博物館です。やはり、奈良、京都、言い換えると古代を中心に日本文化を考え

ることに対して、鎌倉の中世文化に目を向けることが、鎌倉国宝館に寄せられた期待だったのだなということを改めて思うわけです。

つぎの話題に移ります。新装開館の間もない頃の展示室の写真をご覧ください。仏像が写っているのがわかりいただけるかと思います(写真5)。実は、国宝館とは鎌倉の仏教文化に触れる場所なのですね。現在も常設展示で仏像がここに並んでいます。神社境内にある建物に一步入ると仏像が並んでいる光景は、考えてみると少し奇妙なことですね。なぜ神社の中に仏像があるのか。これは、日本の文化を考える上で、たいへん貴重な機会を与えられているのではないかと思います。明治維新を迎えるまで、鶴岡八幡宮では神道と仏教がもっと融合をしていた時代が長く続いてきたわけです。江戸期の神社の境内図を見ますと、平家池・源氏池の間の参道を行くと、最初にくぐるのは鳥居ではなく仁王門だった。護摩堂、薬師堂、大塔、輪堂、舞殿などがあり、それから石段を上れば拝殿、本殿となります。境内に仏教建築がたくさん建っていたわけです。それが明治維新まで続いた景観です。鎌倉でイギリスの軍人が殺害された攘夷事件、いわゆる「鎌倉事件」を本国に伝えたロンドンのデイリーニュース、「イラストレイティッド・ロンドン・ニュース」の紙面には、今でも残っている大きな石灯籠があり、その正面奥に大きな仁王門が描かれています。これが明治になりますと、仁王門が消え代わりに鳥居が立つ。景観が大きく変わるのでですね。背景には明治政府の神仏分離という宗教政策があるわけです。この時、仏教系の建築がどうなったかと言いますと、明治3年に一気に取り壊されます。これは神奈川県許可を得て、廃仏毀釈という動きの中、舞殿の脇にありました大きな「大塔」もあつという間に壊されてしまいました。横浜で出ている英字雑誌に、1870年、明治3年8月16日の号で「八幡様も例外なく、これらの寺院は横浜のカーペンター、大工たちに売られてしまった」と書かれています。かつて神社の中にも仏像があったことをもう一度確認できる場所として、鎌倉国宝館がある。ここで仏教文化に触れることができるのは、とても意義あることだと思っています。

最後の話題は、戦後はどうなったかです。そのために、もう一つどうしても触れておきたい建物があります。それが一昨年まで同じ八幡宮境内で活動を展開していた神奈川県立近代美術館です。実は、鎌倉国宝館と神奈川県立近代美術館は、どちらも危機の後に登場したミュージアムでした。鎌倉国宝館が関東大震災という自然

国宝関係博物館事務協議会

昭和17年(1942)2月26日



- 1882 東京帝室博物館
- 1882 靖国神社附属遊就館
- 1895 奈良帝室博物館
- 1897 恩賜京都博物館
- 1928 鎌倉国宝館
- 1936 大阪市立美術館

- 1 国宝の命令出陳
- 2 国宝等の防護対策
- 3 その他

写真4

災害の後に登場したのに対して、県立近代美術館は、戦争という人災と言ってもいい危機の時代を乗り越えて登場した、新しいタイプの文化施設と言っているのではないかと思います。

この美術館の本来の入り口は八幡宮とは反対側にあり、正門の脇には館名を記したこんなプレートが嵌っていました。神奈川県立近代美術館の下に、英語とフランス語とドイツ語で「モダンアートミュージアム」であると、これまた高らかに宣言していました。なぜ4ヶ国語なの



写真5

か。今だったら中国語と韓国語が求められるかもしれません。しかし戦後間もない時期の英仏独、いわゆるヨーロッパの、あるいは西洋のモダンアートを展示する場としたい、ここでいうモダンアートは、そのまま単純に近代美術と訳すようなモダンアートではなくて、ある種の普遍性を持ったモダンアートであると信じられていた。現代であれば、このモダンアートはあくまでも西洋中心だとして批判されるかもしれません。

しかし、近代美術館が開館した昭和26年の日本は戦争に敗れ、国際的に孤立していました。憲法の前文を読んでいただくとよく分かりますが、憲法公布の時点での最大の課題は国際社会への復帰でした。美術の世界もまさにそうで、復帰すべき先がモダンアートだったのです。その思いがこのプレートに集約されていると思います。

実は八幡宮の参道側にもプレートがありました。真っ赤に錆びてしまっていました。普段は展覧会ごとに立つ看板に隠されていましたが、いよいよ閉館する直前に撤去したのです。実は、その中の一文字をもらいました。鎌倉のK、木下のKというのでKの字を一文字いただき、今も机の上に大切に置いております。

この美術館が登場した背景には、戦後の日本の文化的な復興があると言えます。私も鎌倉に住み始めてもう20年になりますので、折に触れてこの美術館を訪れ、また外から眺めてまいりました。大変嬉しいことにこの建物が残り、そして来春に鎌倉文華館鶴岡ミュージアムとして再生されるということを伺いました。

最後に、このモダニズム建築が神社景観、神社の歴史の中で調和しているのかという問題です。モダニズム建築は四角い箱で、屋根もない建物で、神社の本来の景観とはそぐわないのではないかとされる方は多いのではないのでしょうか。しかしそう簡単に判断して頂きたくない、モダニズム建築の中の「和風」に、目を向けていただきたいと思うのです。日本人建築家によるモダニズム建築は、日本建築と親和性が高い。八幡宮の景観とどのように折り合っているのかをぜひ多くの方々に見ていただきたい。鎌倉国宝館はもともと高床式の建物としてデザインされて、これ自体は和風だと思いますが、新しい要素がここにも織り込まれておりまして、先日訪れた時には陽光が差し込んでいて、扉のスタンドグラスがとても美しかったです。国宝館の活動の意義だけではなくて、建物の価値にも目を向けていただければと思います。鎌倉の中心がここ鶴岡八幡宮であることは言うまでもなく、大変な求心力を持った場所です。

90年前に開館した鎌倉国宝館と、それから池のほとりに1951年に開館して、そして一旦その歴史を閉じ、今また新たに蘇ろうとしている、この2つのミュージアムを是非共存させていただきたい。これを願いとして、私の話を終わります。ご静聴ありがとうございました。

富岡幸一郎氏 講演「鎌倉国宝館黎明期を支えた鎌倉同人会」

富岡です。今日は「鎌倉国宝館黎明期を支えた鎌倉同人会」というお話をさせていただきます。鎌倉同人会には『100年史』というものがございまして、2015年、平成27年に100年を迎えて、その時に作ったものでございます。その中の鎌倉国宝館の建設に関する記事をご紹介します。

鎌倉同人会は大正4年に作られました。鎌倉は明治22年に横須賀線が通り、保養地、別荘地として非常に多くの方が鎌倉に来るようになったわけですね。そういう流れの中で明治末年に陸奥広吉伯爵、これは外務大臣の陸奥宗光さんのご長男で、鎌倉に静養で移られた。この方は外交官でした。そして鎌倉におられた勝見正成、これはお医者さんで、明治20年に



富岡幸一郎氏

鎌倉海浜院でお仕事をされていました。そういった方々が集まり、鎌倉同人会を設立した訳です。先ほど申し上げましたように、2015年に100周年を迎えました。その時の同人会の理事長は山内静夫さんで、毎年同人会が会報誌を出しておりますけれども、ちょうど鎌倉同人会は100周年を迎え、山内前理事長がこういうことを書いてお出しになられた。「この陸奥広吉さんという大きな柱ができ、そしてその陸奥氏の人格、卓見は多くの同士の心を集めたことは間違いない。設立・発起人の顔ぶれを見れば、志を同じくする中央の有力者、そして地元の名士と、鎌倉という都市が新たに生まれ変わったことに同士を得て、残念ながらまだ民意の低かった鎌倉の人々に、鎌倉という土地の持つ歴史的価値を学ばしめる。同時に新しい外国からの新知識をも知らしめる。100年後の今日、鎌倉でいう独自の文化を持つ街が生まれた、陸奥氏が一貫して主張されたこと、それは鎌倉に住み、鎌倉を愛する心ある人々の善意を糾合して、この街をより良いものにする。そのための推進力になる」。これが陸奥氏の鎌倉同人会を設立した趣旨です。住み良い街を作る、明快にして志が高い。まさにこういった思いを持って、鎌倉同人会が大正4年の1月に設立されたわけです。そして同人会は様々な鎌倉への協力、まさに街づくりの仕事に関与して、今日のテーマになっております国宝館の建設に関わりました。

先ほどお話がありましたように、大正12年の関東大震災によって鎌倉は大変大きな被害を受けました。そして貴重な宝物、文化財が甚大な被害を受けたので、やはりなんとかしなければならぬ、という思いがあり、先ほど木下先生のお話にもあったとおりでありまして、そういう流れの中から同人会が大正4年の設立以降も文化財の保護に力を入れてきたわけです。そういう意味で、国宝館というものが必要ではないか、ということになりました。こういう中で、大正13年の6月に各寺院から、今回の関東大震災のような天変地異の際、国宝級の什宝をはじめとする貴重な文化財を、それぞれのお寺では到底守ることができない、なんとかまとめた形で守ろうということで、この同人会の規約第1条にあるように、「歴史的物及び勝地の保護継承を掲げ、段葛の改修、寺院の宝物調査や古文書の蒐集、『鎌倉重宝一覽』の発行」などを積極的に進め、同時に鎌倉の代表的な文化財を広く世に示し、かつその保全のためにしっかりした博物館が必要だという認識で話し合いを重ねたのです。そして博物館建設の要望が鎌倉同人会から鎌倉町へ出されました。町としては、その趣旨に異論はないが、緊急を要する復興課題が山積しているので十分熟慮する時間が欲しい、ということであった。確

かに町の実情は理解できるので、以後同人会と町とで共に実現方法を探っていこう、ということになったのでございます。こういう段階を経まして、大正 14 年に入りまして、同人会が主体となって具体的に建築費の国庫の補助申請を、県知事や文部大臣、大蔵大臣に向けて陳情した。陸奥さんをはじめ非常に当時の力のある方々が関わりましたので、こういった陳情をしたわけです。それだけでなく荒川巳次理事長、この方は 2 代目の同人会の理事長で鹿児島・薩摩のご出身です。1857 年、安政 4 年にお生まれで、明治に入りまして鉄道のお仕事をされて、上野、東京駅の初代駅長をされています。さらに外交官としてもものに活躍し、清朝の李鴻章との交渉などもした方です。93 歳まで長生きをされて昭和 25 年に亡くなられておりますが、同時に国宝館の初代館長も務めております。この荒川理事長と陸奥広吉前理事長は、三井、岩崎両家に建築費の寄付を依頼し、両家から各 5 千円の寄付を受け、これを町に引き継いだということです。また町議会では、国宝館を鶴岡八幡宮境内に建設することが決議され、町の予算から 7 万 5 千円を支出、国庫から 2 万円、県から 5 千円の補助を獲得することにも成功しました。この 7 万 5 千円というのは、正確ではありませんが、だいたい今の 5 千万円を超えるぐらいの予算になると思います。とにかく作るためにはお金がかかるので、様々なところからお金を集めて国宝館を建設しようとなりました。しかし一方で国宝館建設に反対する人もいた。『100 年史』には、彼らは「一カ所に什宝を集めると観光客がそこだけに集中してしまい、鎌倉全体の発展の障害となり、ひいては衰微の原因になるのではないか。また、国宝館に寺宝を集めてしまつては、寺宝ゆえに参詣者がある各寺院の経営はどうなるのかとの論陣を張った。これら反対する人たちの中には、同人会が町や県を飛び越えて直接大蔵省などに働きかけた「頂上会談」への反感もあったようだ。」とあり、同人会が直接国や大蔵省と繋がりを得たことへの反発もあったようですね。いろいろな意見があることはいいと思いますが、そういった反発も一方ではあった。しかしそういう中から、大正 15 年 11 月、内務大臣から八幡宮境内白旗神社隣の土地を町に無償貸与する旨の許可がおりました。昭和 2 年、1927 年 3 月に地鎮祭がおこなわれ、建築は着々と進められていったが、建築費 12 万円のうち半分の 6 万円が不足していた。同人会としては、この年度の第一に取り組む事業として基礎部分の資金を募ることにした。しかし、同人会の名で募集するよりも、各界有志が発起人となって募金活動にあたる方が良く、という意見が出され、56 人が発起人に名を連ねた「鎌倉国宝館建設に就き大方有志の義醸を請ふ」という文書が出来上がりました。それによって各方面から多くの寄付金が集まったようです。翌年の開館を目指して、町では国宝館館長の人選が進められました。建設の経緯からして、館長を同人会から出すのが妥当ではないかということで、荒川理事長を館長に、相沢理事を主事に内定するといった同人会の中での相談があったということです。相沢善三さんという方は教育者として大変活躍された方で、『鎌倉寺社めぐり』といった鎌倉の案内に関する先駆的な著作の出版などもされていた方です。こういう経緯を経まして鎌倉国宝館の建設が進みました。まさに鎌倉同人会が国宝館の誕生に大きく寄与したといえるのではないかと思います。

『100 年史』の中に写真がございまして、国宝館本館の正面階段の前に相沢善三と岡田信一郎が写っております。岡田信一郎は本館を設計した方で、なおかつ同人会の会員の方でした。こういう経緯で鎌倉国宝館が出来上がったということです。しかし資料を読んでまいりますと、資金を集めるということは非常に大変だったというのがわかります。何れにしても鎌倉町、そして同人会の念願でありました国宝館がこういう形で誕生したということです。同人会の働きによって実現した国宝館は、町にとっても全国に誇りうるものであり、町は国宝館運営に思い切った額を当てていた。具体的には、昭和 3 年度の町予算は総額 45 万円で、国宝館の費用は、経常、臨時を合わせまして 4 万円となっており、全体のうち 1 割近くにもなっています。これは大変な額だと思えます。この時の図書館費が 399 円であることと比べても、国宝館への力の入れようがうかがえますし、

翌々年度の町予算総額が 25 万円です。国宝館費は 2 万 7 千円が当てられています。町が国宝館のスタートに大きく予算配分しているということになります。

国宝館の出口のところに掲げられておりますプレートです。今日私も午前中に国宝館の展示を見てまいりました。大変素晴らしい展示内容でしたが、改めてこのプレートを見てまいりました。「従来鎌倉の寺社仏寺には国宝若しくは其に準ずべき貴重美術品を蔵せること多きに拘はらず、是が保存の方法確立し居らざりしは識者の夙に憂ふる所にして、鎌倉同人会創立の際発起者は他日是が適当なる方法を得んことを希望せしに、因らずも大正十二年九月の大震災に会し社寺の殿堂等大抵倒壊し」た。そのため、これら宝物を保存するとともに「鎌倉時代の文化芸術を鑑賞し又之を討究せん」と欲する人のため国宝館建設を計画した」ということでもあります。まさに中世鎌倉の大切な文化財を鑑賞し、これを研究する、そのためにこの国宝館を建設することは非常に大事なことであったというような内容が書かれております。そして最後に「昭和三年四月一日 鎌倉町長清川来吉、鎌倉同人会理事長荒川巳次」と記されています。

建築家の岡田信一郎という方は、明治 16 年の東京の生まれで、一高、東大を出まして、和洋問わず、歴史的様式に従った建築を鉄筋コンクリートで建てることに定評があった方なんです、「様式の天才」と呼ばれたそうです。中之島の公会堂、鳩山一郎邸、歌舞伎座、黒田記念館、明治生命館などの建物を建てた方が、この国宝館の設計に関わっていたということでもあります。岡田さんは鎌倉在住で、先ほども申し上げましたように、鎌倉同人会の会員でございました。こういう方々が、それぞれ力を寄せまして、そしてまた資金を集めまして鎌倉国宝館を建てたということです。同人会の規約ですけれども、先ほど申し上げました第 1 条ですね、「歴史的物及ビ勝地保護、教育、衛生ノ普及、風俗ノ改良、産業ノ奨励其他公共ノタメ有益ナル事項ノ遂行ヲ期シ本会ヲ組織ス」というものでして、規約は全部で六条ございますが、第二条以降は会の運営の規約です。この第一条が鎌倉同人会の設立の目的であるということがわかります。田邊新之助という方は、設立趣意書を書いた方ですけども、鎌倉女学校の創立者でありまして、校長でありました。この田邊さんという方が、「同人会」という言葉を中国の易経から「人に同じうするに野において。亨る。大川を渉るに利ろし。君子の貞に利ろし」、広く人材を集めて公正明大に事を処していく事を根本理念とするという意味に因んで考案されました。

鎌倉国宝館 90 周年というまさに歴史の黎明期に同人会が協力させていただいたということを紹介させていただきました。この『100 年史』がございますので、今日はここで本の販売はできませんので、ぜひ鎌倉同人会の方にお尋ねいただければと思います。鎌倉の歴史がこもっております。以上で私の話を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

吉田茂穂氏 講演「鶴岡八幡宮と鎌倉国宝館」

こんにちは。鎌倉国宝館開館 90 周年おめでとうございます。国宝館が八幡宮の境内にございます関係で私がお声がけいただきました。先ほど木下先生が戦時下の話を、富岡先生は同人会のお話をなさいました。八幡宮も実は戦時下のことは 1 つの歴史になるんだということ、それから同人会には昔から大変お世話になっているものですから、そのことをご報告してお礼の気持ちを表したいと思っております。時間が限られておりますので、どの程度出来ますかわからないですけれども、お聞き取りいただきたいと思います。

先ほどからお話がございましたように、関東大震災の震源地に近かったので、鎌倉は大変な被害を受けました。海の方では材木座、由比ガ浜、坂の下。長谷は高波が押し寄せて二次災害があったと伺っております。そして山の方では、社寺や文化財が大変被害を受けました。「惨状を極めた」と新聞には書かれておりましたけれども、鎌倉の町全体のことと伺い知ることが出来るわけです。八幡宮も先ほど木下先生のお話のところで映像に写っておりましたが、御本殿のほか、石の玉垣や灯籠が倒壊し、社殿が少し動いたりしたということがありました。



吉田茂穂氏

この関東大震災のことが端緒となり鎌倉同人会が大正 4 年に設立されました。先程お話をくださったように、社寺を、あるいは什宝類を守らなければならない。震災が起る前からそういったところに気を配っていたのですが、はじめに八幡宮がお世話になりましたのは大正 7 年で、段葛が全面的に改修されました。これは同人会のおかげでございまして、大変お世話になりました。それから 100 年後の平成 26 年、4 年前の改修でした。綺麗になったと喜んでくださる方と、あまりにも綺麗になりすぎたとも言われて、どちらの評価を受け入れれば良いのだろうかと思えますけれど、まあ歩きやすくなったというところでご勘弁をいただきたい。また時間が経てばそれなりに味わいも出てくるだろうと思っています。それもやはり同会の応援があったから続いてきた。同会には、大震災によって倒壊した社寺の堂宇の建て直しもそうでございますけれども、その中の什宝を何とか守らなければならないという高い志があって、国宝館建設の要因になった。これは紛れもない事実で、そのことによって当時の鎌倉町が動かされた。

岩崎、三井家両家から五千円ずつ寄付があって、それを町の方に引き継いだのを町は知らないという訳にはいかないので、国宝館建設ということになったんだろーと思えますけれど、その敷地として選定されたのが八幡宮の境内でした。当時の宮司さんは秋岡保治さんという方でした。明治の神仏分離令によって宮司職が置かれ、秋岡さんは 9 代目の宮司となります。ちなみに私は 15 代目ですので、私の 6 代前の宮司さんが、この八幡宮の境内のうちの 1,200 坪を国宝館の敷地として無償で町にお貸しすることを決断されたんです。「各社寺、大震災で倒壊したる社殿堂宇の普及まだ成らざるをもって各社寺の貴重な什宝も盗まれるあるいは火災に遭う」、そういう難事にさらされている実情を考えると、敷地として八幡宮の境内をお貸しするのが当然だということで、大正 14 年に秋岡宮司さんが決断をし、国宝館が建設されたということです。八幡宮境内が選定された理由は、いくつかございます。地の利を得て人が来やすい。人家の密集地でなく、火災の脅威を除ける。敷地に余裕がある。建築美を發揮できる。という理由から、町では八幡宮の境内を候補地にしようと判断されて、決定したようです。当時、年間で 6 万 8 千人を目標にして、収入は 6 千 9 百円を見込まれたようです。運営経費については 6 千 9 百円の中で全て賄うということで、国宝館を建てることに決定しました。そして昭和 3 年に国宝館は開館します。

時系列で境内のことを申しますと、大正 12 年の関東大震災により楼門や舞殿が倒壊しました。昭和 3 年 9 月に楼門がようやく立ち上がり、昭和 8 年 9 月に舞殿が復旧いたしました。かなりの時間を要して復旧していくわけですが、8 年、9 年を過ぎて 10 年を越えた頃には、実は国宝館を八幡宮へ移譲したらどうか、という議論が出てまいります。その理由は、目標としました 6 万 8 千人、そして入館料 6 千 9 百円を見込んでいたのがちょっと難しかったからだったようです。ところが町の方では、せっかく心血を注いで建てたのだから、今までどおりに運営していくんだ、というのがその当時の町長さんの判断でした。八幡宮に移譲するという話はこ

こに消えていきました。

そして宝物類の疎開の話がありましたけれども、昭和 20 年の 6 月に文部省から、社寺や鎌倉国宝館にある宝物類を津久井郡の方に疎開させなさいという通達がありました。それに従って宝物類を疎開させましたが、そういう中でも国宝館は展示活動をなさった、というお話でございましたけれども、戦争が終わった翌年の昭和 21 年 4 月には、宝物類が疎開先から帰ってきた。八幡宮には本当に国宝中の国宝ともいえる美しい刀剣がございまして、こちらについては埼玉の方へ疎開したんです。他の宝物類は全部津久井郡、神奈川県内へ移した。名古屋の熱田神宮の御神体は天叢雲剣でございすけれども、こちらも当然文部省から疎開させなさいといわれ、愛知県から兵庫県の山奥の方へ疎開させた。刀剣というのはやはり普通の宝物とは違ったんですね。より遠くの分からないところに移されるという、刀剣はそのような扱いをされました。

戦時下の国宝館と八幡宮境内のことを申しますと、終戦は 8 月 15 日でした。ご聖断により、終戦となるわけですけれども、その前の 20 年 7 月には、八幡宮の御本殿の屋根に機銃掃射されるんですね。

それから 9 月 13 日、14 日には、現在も八幡宮の神職は 9 月 15 日の例祭を前にして由比ヶ浜に出て水垢離をするんですね。20 年 9 月 13 日には、進駐軍の軍艦が相模湾沖に停泊したため、重油汚染で水垢離をするどころではなく中止になった。八幡宮の境内が終戦後は GHQ が神道調査に来たり、非常に慌ただしいものがありました。

昭和 16 年、戦争は日本軍が南方でまだ力を保持していた時代なんですけれども、ダグラス・マッカーサーは、この年の 3 月にフィリピンのコレヒドール島という小さな島からミンダナオ島の方に逃れてオーストラリアに退避した。この時言った言葉は、フィリピンの国民に“I shall return”「安心してくれ、必ず帰ってくるから」であった。有名な話ですが、彼は昭和 20 年の終戦時に厚木基地へ降り立ちます。サングラスをかけて周辺を見回すような写真がありましたけれども、これは当時の厚木の海軍飛行場で専用機のパターン号のタラップを降り立ちまして、今の横浜のニューグランドホテルを宿舎とした。彼はその宿舎に入る前に鎌倉に来て八幡宮に寄り、それからホテルへ行った。その後は東京の方へ移動して行くんですけども、20 年 8 月 30 日に八幡宮へ来ました。それから 9 月 2 日にミズーリ号の甲板上で降伏文書の調印式があった。日本代表の重光葵が調印し、戦争終結となりました。9 月 2 日の午前中で、調印式を済ませたマッカーサーは幕僚 12 名を帯同して、八幡宮へお参りに訪れました。本殿の楼門の中に入ると深々と頭を垂れ、お札所で破魔矢を貰い受け、12 名の幕僚に 1 人ずつ渡して帰った。この当時の座田宮司さんがマッカーサーに気づかれて、社務所へ上がってくださいと言いましたら「今日は時間がないから帰るけれども、必ずまたお参りに来ます」と。さらに宮司さんに対して「あなたがまだ子供の頃に私はここに来てるんだよ」と言った。実は彼が新婚旅行で日本に来た際に、八幡宮に来てお参りをしたということが分かったんです。そして必ずもう一度お参りするからと言って、9 月 29 日に今度は奥様を連れてお参りされた。ですから都合 4 回八幡宮にお参りをされたわけですが、これにどういう意味があるのか。神道に対して非常に厳しい GHQ の神道指令が出て、国の手を離れて独立した宗教法人として神社神道は生きていくわけですけれども、非常に厳しいものがあつた。しかし、なぜ彼が八幡宮へ 4 回もお参りに来たんだろう。これについては、本人がはっきりと書いた物はないんですけども、秘書の人たちの話を総合すると、彼は soldier、「兵士」ですよ。鎌倉の八幡宮は武士道拠点であり、頼朝公によってその位置づけがなされた。おそらく彼は頼朝公に対する尊敬の念があつたと私は考えています。それを物語るのが、その 9 月 29 日に奥さんと参拝し、その後 10 月 28 日に八幡宮の中の白旗神社（源頼朝公が御祭神）のお祭りに 200 名の連合軍の将校をお参りさせている。戦争が終わって間もない時にお参りしたのです。やはり武士道、武士・頼朝公に対する尊崇の念があつたのではないかと。それをお参りという形で代弁したと私

は思っております。

それから昭和 25 年の 6 月 25 日に朝鮮戦争が勃発します。その翌年の昭和 26 年にマッカーサーは「老兵は死なず、消え去るのみ」という言葉を残して、第一線を引いていくわけですがけれども、私自身はあれだけ厳しい政策を取ったマッカーサーが八幡宮に 4 度もお参りをした、約束も果たした、そのことの意味を考え続けております。

ジョン・ルース前駐日アメリカ大使は、大銀杏が倒れた時に、何故日本人はあんな銀杏に心を痛めるのか。自分の出身地カリフォルニアのヨセミテ公園にはこの銀杏よりはるかに大きい木があって、木の下を車が通っているけれど何とも思わない、というようなことを言っていました。私は自然信仰の話とともにマッカーサーの話もしました。そうしたら彼は、マッカーサーが訪れたように最低 4 回は八幡宮にお参りします、と約束したんですが結局 3 回で終わっちゃった。この前、年賀状が届きまして、彼は覚えてました。約束を果たしていないけれども必ず行くからと。だから今度の正月あたりにみえるのかなと密かに私は楽しみにしておりますけど、そのような歴史があるのがこの八幡様でございます。

その境内にある国宝館ということでございますが、昭和 56 年に八幡宮の境内を整備するのに専門家と意見を交わす御創建八百年境内整備委員会というのを開きました。その時のメンバーが東大名誉教授の坂本太郎さん、建築の福山敏男さん、赤星直忠さん、永井路子さんといった方々でして、皆さんで激論を交わしました。その時に、県立近代美術館がこの史跡八幡宮の中にあるのは相応しくないという結論が出たんですね。それを知ってか知らずか、その後葉山の方に大きな美術館を建てられて、そちらに活動拠点を移された。一方、国宝館について委員会では、同じ境内にあって何の抵抗もない、だから共存していけば良いということになりました。だから今までと同じ佇まいです。八幡宮としても国宝館を活用させて頂き、共存してゆくということでございます。今日のメッセージはそれでございます。ご清聴ありがとうございました。

【パネル・ディスカッション】

木下直之氏

富岡幸一郎氏

吉田茂穂氏

コーディネーター 鈴木良明（鎌倉国宝館館長）

鈴木：それではただいまから、鎌倉国宝館開館 90 周年記念シンポジウムの司会進行をつとめさせていただきます。パネリストの皆様、そして会場の皆様、どうぞよろしくお願いたします。

先ほどお話申し上げましたけれども、この企画は鎌倉国宝館の 90 年の歴史を振り返ってみよう、原点・出発点あたりとともに経過をみておこうとすることを本旨としました。歴史を振り返っておくことは重要なことで、すぐに 100 周年、120 周年が来る。その時にどういう国宝館であってほしいかを、私たちが考えるだけでなく、会場の皆様とともに考えたいと思います。それでは、先生方のお話をお聞きしていきたいと思いますが、ちょっといくつ



か確認といいたいでしょうか、私から質問をさせていただくことから始めさせていただきます。

国宝館の歴史を考えるに、関東大震災の時がとても大きなきっかけがあると、私は間違いないと思っています。それ以前の歴史といいたいでしょうか、それ以前の国家の宝物類に対する考え方、例えば江戸時代以降、近代国家の政策の中での位置づけが国宝館の建設とどう結びついてくるのかについて、お話しいただければと思います。木下先生、よろしくお願いします。

木下：まず鎌倉国宝館以前を考えてみましょう。それまでに宝物というものがどのように伝わったかといいますと、やはりそれを伝えた場所は社寺ですね。神社であり寺である。それから、もう1つ重要なものが大名家です。いずれもが明治維新によって大きく揺らぐことになった。大名家が揺らいだ原因で一番分かりやすいのは廃藩置県でしょう。藩そのものがなくなってしまいますので、先祖伝来の家宝を持ちこたえられなくなる。手放さざるを得ないことにもなる。明治の終わりぐらいになりますと、旧大名家から市場に流れ出る宝物がたくさんあります。一方で、それらを守ろうとした動きもあって、例えば尾張徳川家はいち早く財団法人を作って財産を守り、現在の徳川美術館を建設しました。社寺はどうであったかという、やはり明治政府の神仏分離政策による動揺が大きかったと思いますね。寺の方が経済的に厳しい立場に置かれた。その中で、国として守っていこうという動きが出てきます。これが今日の文化財保護につながるのですが、最初は「古器旧物保存」という考え方で、廃仏棄釈に対する反省であったと言えます。そして生まれた法律が古社寺保存法でした。文字通り、古い社寺の宝物を守ろうとしたのです。その時点でようやく鎌倉にも守るべきものが生まれたのだらうと思います。ただ、具体的に守る法律ができて、守る場所としての博物館がなかった。国立博物館が東京、奈良、京都につぎつぎと出来ませんが、その後は続かず、鎌倉では、関東大震災を機に、トップダウンではなくボトムアップで国宝館が生まれた、と大雑把に言えばそのようになると思います。地元の要望で国宝館が出来てきたことの意義は大きいですね。実は、宝物というものは一般に公開される必要はない。例えば開帳や風入れ、秘仏公開という形で信者に見せることは古くからあったのですが、博物館にわざわざ秘宝を運んで展示する必要は全くない。それが行われるようになったのは、明治になると宝物類が国の共有財産であるという考え方が芽生えたからです。例えば、政府の依頼で、鶴岡八幡宮の宝物が明治6年のウィーン万国博覧会に出品されます。その帰りに船が沈んで宝物が失われてしまうという悲劇もありましたが、こうしたリスクを冒してまでも公開されたのは、宝物が国家の共有財産という考えが社会の中に生まれてきたということです。

鈴木：ありがとうございます。そういう過程の中で国宝館が誕生していったわけですが、再度先生にお聞きしたいのは、国立三館（奈良・京都・東京）、いわゆる帝室博物館と鎌倉での施設建設との関係は。鎌倉に帝室博物館ができなかった訳はどのようなことなのか。それは歴史の認識とか価値の尺度が違っていたのか。端的に言えば、どうして国は鎌倉を捨てたのか。いかがでしょうか。

木下：それはですね、古社寺保存法ができる前に、明治政府が古社寺の宝物調査を行います。どこにどのような宝物があるか。台帳作りですね。江戸時代にもそのような調査はあったのですが、包括的調査は明治政府からです。そこでいう宝物とは圧倒的に古代のものであり、古社寺とは奈良、京都の社寺を指しました。その代表が東大寺の正倉院宝物です。関西にある宝物は天皇家につながるものが多い。ですから、

明治の国立博物館がなぜ帝室博物館であったのかと言いますと、当初は帝国博物館であり帝室博物館ではなかったのですが、結局のところ皇室財産を保存し、それを国民に公開する場として博物館が成立していく。創設当初の博物館は歴史系・自然史系のコレクションも有する総合的な博物館だったのですが、すぐに古美術館としての性格を強め、そのコレクションは皇室財産として扱われる。戦後までずっと帝室博物館のこの性格は続き、それが国立博物館に変わるのは新憲法の施行日なのですね。1947年5月3日です。つまり新憲法に応じて、博物館のコレクションも国有財産に切り替わるのです。所管も宮内省から文部省に変わりました。日本文化が古代の奈良・京都を中心にとらえられてきた中で、中世の東国は脇に追いやられた。鎌倉の武家文化は一段低く見られたのでしょうか。しかし、武士文化の評価は日本の近代史においては戦争に絡んできます。古代偏重から中世の鎌倉に光が当たるということになった、ということが言えると思います。元寇展など、戦時下の国宝館で開かれた展覧会は興味深いですね。本日知ったのですが、日本占領後にマッカーサーが鶴岡八幡宮へ4度も足を運んだという事実は興味深いことです。八幡神が戦の神だったからでしょうか。

鈴木：ありがとうございます。それでは富岡先生にお聞きしましょう。鎌倉国宝館誕生の背景に鎌倉同人会の活発な活動があるわけですが、このような鎌倉同人会の大正期の動向は鎌倉地域だけの問題なのか。大正デモクラシーといった社会背景と連動しているのでしょうか。

富岡：大正デモクラシーとは直接関りはないだろうと思います。やっぱりこの鎌倉っていう場所ですよ。その文化遺産をいかに大切にしていくか、ということだったと思います。同人会の設立書はかなり長いので省略しますが、鎌倉は自然も素晴らしいし、交通の便も良い。内外の人もこの地に遊びに、ここに住むのも良い。今日の鎌倉が日本の鎌倉であらずして世界の鎌倉になるのは、この場に住む人々が常に誇りとしている。ただしその後、実際に鎌倉のを見てみると果たしてそうなのか。「古跡・名所の保存方法に管理せられり」というべきか。鎌倉都市のかつての姿について、今日の鎌倉人にそれを認めることができるのか、大切な町づくりはいかなるものか。駄目だったんですよ。変わらないじゃないですか今の鎌倉と。心地よい街並みにするために、様々なことを努力すべきではないかと思います。

木下：同人会の設立時は、人の多い時は何人ぐらいですか。

富岡：24名とか、最初はそのぐらいですね。最初の会の趣旨に賛同した23名がいました。当時はまだ貴族とかそういう人たちがいまして、それが段々と広がっていった最後には資金をそろえ、動き出す時はお金持ちの人たちだったが、動き出すことで市民にも広がって、いろいろな活動が実を結んでいきました。

木下：多くの博物館・美術館は戦後に作られました。まず明治期に国がつくり、戦後の復興期、さらに高度経済成長期には地方自治体が競うように作った中で、国宝館はそのどことも違う出自です。とてもユニークです。

富岡：昭和になりますと鎌倉文士という人たちが現れて、昭和20年の戦争中に貸本屋をやっていました。鎌倉や周辺に空襲があり、3月10日の東京大空襲などもあった中でものすごい活動をしました。

鈴木：ありがとうございました。同人会は国宝館や図書館などの文化施設の建設に際しての働き、そういった意味では私たちにとっては恩人ということになるだろうと思います。そして、現在も活動なさっている。

続いて宮司様にお聞きしたいと思います。戦中・戦後の混乱期の中で、八幡様は国宝館に協力的に動いていただいていたと承知していますが、国宝館には開館以来書き続けてきた庶務日誌があり、この辺りの動向を知ることができる。八幡様にも記録が留められていらっしゃるようで、私どもの日誌にはない、国宝館設置や宝物類の保護に関しての考え方などをご紹介いただければと思います。

吉田：神社として考えるならば、明治初頭、神仏分離令により、宝物類・文書類の散逸、建物の撤去などもありました。初代の管崎宮司さんが苦労して、宝物類を買い戻したことも、政子の手箱を国からの要請でウィーン万博に出陳し、帰途、伊東沖で船もろ共に、この手箱も沈んだことで明治天皇から紋章を下賜されたこともありました。そして太平洋戦争後、神社は国家管理の手を離れ、苦労の歴史が続いた。

鈴木：ありがとうございました。それでは少し話を変えさせていただきます。皆様すでにご存じでしょうが、文化財保護法という法律がございます。これに沿って事業を展開しているわけですが、昨今改正がなされました。その改正の要点ですが、文化財の活用が強調されています。この「文化財の活用」というキーワードから、何がこれから想起とされるか、また国宝館としてどう取り組むべきか。国宝館の将来的な方向性やあり方をお聞かせいただきたいと思います。

木下：私は、昨年春から静岡県立美術館の館長を兼任しています。その立場から言えばたくさんの人に来ていただきたい。せっかく展覧会を開くのですから、より多くの方に来てほしい。しかし、観客の立場から言いますと、出来るだけ人が少ない方がよい。誰もいなければもっとよい。鶴岡八幡宮境内にあったかつての神奈川県立近代美術館は、小さくて静かな美術館でよかったなあと思いますが、昨今、人を入れるというよりも、文化財を「活用」せよという風が吹いてきた。要するに、観光客を呼べということです。昨年春にあった「学芸員はガン」という大臣の発言を覚えていらっしゃいますか？あれは観光マインドを知らない学芸員はガンだという発言でした。これからは観光施設としてミュージアムを考えていこうという強い流れがあります。すでに鎌倉には観光客がどんどん増えていますが、博物館のキャパ、空間的には限度がありますので、ただ人が入ればよいというものではない。特に鎌倉国宝館に期待したいことは、いろいろな展覧会を、きちっと研究に基づいてやってほしいものです。意義のある展覧会をやってほしい。先に話題になっておりましたが、今回の展覧会の手掛かりとした鎌倉国宝館の業務日誌はたかだか90年です。八幡宮の社務日誌は数百年にわたって記されてきました。こうしたものを手掛かりに、歴史と向き合う展覧会を実現させることが、これからの博物館の譲れない姿勢なのではないだろうか、私も博物館人の一員として思います。今後もぜひ地道な活動を続けていきたいものです。ありがとうございました。

鈴木：応援演説をいただきありがとうございます。富岡先生にも「文化財の活用」についてお聞きしたい。

富岡：今回の展示は木下先生の言うとおりの素晴らしい展示だと思います。次の世代に伝えるという意味でも。

鎌倉は年間に延べ2千万人近い観光客が来ています。そういう中で、どのように鎌倉の文化財を活用していくのかというのが課題ではないかと。もう少しいろいろな意味で鎌倉の文化施設間で連携が取れるような、そういったスタイルになっていけばいいなと思います。例えば、最近日本遺産になりましたけど、鎌倉には近代的な建築物も多いのに、結局それがバラバラなんです。市の力、組織、市の管轄からずれるからでしょう。それをどうしたいか、例えば「鎌倉文化機構」などとして、結合した文化政策もしくは文化財を活用できるような行政システムを作る。そうするとうまくマッチングするのではないのでしょうか。

鈴木：ありがとうございます。宮司様から何かございますでしょうか。

吉田：観光面からの活用とか言われてまして、金沢の美術館なんかは参加型でありますけれど、これも痛し痒しでありまして、国宝館には本来のじっくりとした味わいのある施設であってほしいと思います。しかし一方で、人を呼ぶことも考える必要があります。

鈴木：ありがとうございます。ここから、会場の皆様よりパネラーの皆様へご質問が寄せられていますので、順次お答えいただきたいと思います。まず、同人会の現在の活動について質問がありましたので、富岡先生からお話いただけますか。

富岡：今、鎌倉同人会にはお金がありませんのでね、大きい国宝館を建てたりはできないのですが、非常に大勢の会員がおりますので、同人会講座というものをやって、例えば大仏様をテーマにしたりと、鎌倉の歴史について様々な方に講演をお願いしたりしています。それから、同人会の前理事長の山内さんのご縁で映画会をやっています。あとは源実朝公の歌会や俳句大会などといった活動もしています。

鈴木：ありがとうございます。それではですね、鎌倉文華館、鶴岡ミュージアムのことについて質問がありましたので宮司様からお話いただけますか。

吉田：エレベーターの新設工事をまだやっている最中でして、工事が来年の3月いっぱいには終わるだろうと思います。近代美術館の時のような絵画の展示だけでなく、鎌倉の歴史について知りたいと思って来られた方にも、なんとなく鎌倉に来られた方にも、いわゆるビジターセンターとして展示物を見て、その後は実際に現地に行ってください。そういうような役割にしたい。それから年に3、4回は美術品の展覧会を予定しています。

具体的には来年の4月にプレオープン、そして8月にはオープンしたい。鎌倉を紹介するビジターセンターとして年に3、4回は展示活動をし、他の時期には講演会を開催する、ということでもよろしくお願います。

鈴木：ありがとうございます。マッカーサーは日本が好きだったかというご質問が会場の方からありますが、宮司様からお話いただければと思います。

吉田：そうですね、日本には軍の攻撃に遭いフィリピンで一度逃亡してますから、あまりいい思い出をしてなかったでしょうけれども、昭和天皇に面会してから考え方が変わった。離日が近くなって吉田茂首相の名誉国民の称号を与えたいとの申し出を、マッカーサーが、それだけは受けられないと断って帰って行きます。八幡宮に対しては武士道、頼朝公への思いがあって、軍人（武人）なるが故に、尊崇の念さえていたんだらうと思います。最後に日本の戦争は防衛戦争だったとマッカーサー自身言ってますからね。そういったことを考えると、まあ最終的には好印象をもって帰っていったんだらうと思います。

鈴木：ほかにご質問がいくつか寄せられていますので、これらは私から説明させていただきます。ご質問は、「国宝館には何点ぐらいの国宝があるのでしょうか。また、その中で重要なものは何ですか。」というご質問です。

ただ今、国宝館では約5,000点収蔵しています。国宝が7件、45点、重要文化財が91件、880点。他にも県や市の指定品があり、収蔵品の大半が指定品となっています。

もうひとつのご質問は、戦後、国宝館の守衛が米軍憲兵により殺された事件についてです。詳細は省きますが、当時の記録や報道などを見ますと、町長が心痛した様子が残されています。どちらも職務に忠実だった。忠実さゆえの悲劇であったと心情を語っていることに象徴される事件であったように思います。

それからもう1つのご質問です。それは、これから国宝館が迎える100周年や更なる将来について、その時の構想は如何、というものです。本日のシンポジウムの本旨にあたるご質問です。

100年で何がやりたいか、何ができるかは、市長さんはじめ各方面と相談したいと考えています。市民の皆さま、ご来場の皆さま方には100年目や更に将来については是非注目をしておいていただきたい。

今、博物館や美術館を取り巻く経済状況は決して良くないと思います。確かに上野・六本木界限の博物館、美術館では大変な混雑が見られる一方、地方の博物館、美術館では閑古鳥が鳴いていて、閉館を余儀なくされる館もあると聞き及んでいます。当館はまだそうではないのかも知れませんが、そういう環境がひしひしと身を感じているのがこの私でありまして、こうした中でとりあえず、100年に向けて、是非鎌倉国宝館という博物館施設を再認識していただいたり、皆さまの力で盛り上げていただければ、将来にわたり、保存の場、展示の場、研究の場としての大きな役割があるのではないかと、シンポジウムを通して改めて思った次第です。

最後になりました。本日は長時間にわたり、パネラーの皆様の活発なご意見と会場のご協力によりシンポジウムを有意義に進めてまいりました。厚く御礼申し上げます、シンポジウムを閉じたいと思います。ちょっと時間が過ぎてしまいましたが、ご参加の皆さま方、本日は誠にありがとうございました。

鎌倉国宝館本館（右）と、同館扉スタンドグラス（左。スタンドグラス中央の星月のマークは旧鎌倉町の町章である）

